

榛木翁書簡五種にふれて

道麿研究の補記

発刊にあたって

私たちの住む養老町には、多くの地域で活躍し、様々な分野でその礎を築いた先人がいました。中でも現在の養老町飯ノ木でお生まれになった田中道麿翁は、幼い頃から歌を詠み始め、環境に恵まれずとも勉学の志を失わず、国学の研究に傾注されました。その業績は、かの本居宣長が「名古屋での日本古典の学問は道麿の努力で始まった」と讃えるほどです。

養老町教育委員会では、このような翁の功績を顕彰するため、田中道麿翁顕彰会事業を継続して参りました。また『原文筆写草稿 田中道全集』、『道麿さんの歌 田中道全集 解釈篇一』、『養老町が生んだ国学者 田中道麿さん』の三編を刊行し、第二、第三の田中道麿翁を育むべく、その研究成果の周知に努めて参りました。そしてこの度、翁の手による書簡を中心に、その人柄や人物像を窺い知ることができる史料を『榛木翁書簡五種にふれて 道麿研究の補記』と題してまとめることができました。より多くの方々がこの冊子を手にし、郷土の先人田中道麿翁についての理解を深めると共に、郷土の歴史や文化財へ関心を寄せる一助となることを願ってやみません。

最後に、本書の発刊にあたり、多大なご尽力を賜りました山口一易氏に、心より厚くお礼申し上げます。

平成二十八年十月

養老町教育委員会 教育長 並河 清次

はじめに

平成二十五年の秋、養老町田中道麿翁顕彰会事務局保管の顕彰会発足当初からの文書綴の中から昭和五十三年七月中西慶爾氏の手になる小冊子「榛木翁書簡五種」を見出した。翁の書簡のことは以前耳にしたことはあるが、その存在は全く知れずこのめぐり合いは貴重なものだった。

中西氏に依れば「榛木翁書簡五種」は田中道麿翁が郷里の門人柏渕藤左衛門に与えたるもので、末孫の柏渕東氏の所蔵にて二曲屏風に仕立てられていたものを、大正十一年四月大久保休吾氏（橋爪の人大正十四年刊行の「養老郡志」編集 昭和十一年歿 同郡志の人物田中道麿の項中、この書簡の一部が記載されている）が写し置かれしものである。原本は東京に於て大正十二年九月の関東大震災にて焼失したと、今日この冊子を得たことはまことに不思議な縁を辿ってきたものである。

写とはいえ道麿翁の書簡五通!! 翁の学問の深さを知る上からも、又日常のくらし生活振り、考え方といった諸般を知る身近な貴重な資料である。この資料に接した嬉しさ……このまゝ眠らせて置くべきではない。できるだけ多くの人に知って戴き今後の研究の資になれば幸いと念からそぞろ雑な力を顧みず筆写を試みることにした。

筆写にあたっては原文に従って候文体、仮名遣、句読点、序仮名などそのまゝ記すことにした。但し字句の読み、意味……事項について調べた範囲の解説を付け加えた箇所もある。

序に、

① 加藤磯足（美濃路起宿の主 細井平洲・田中道麿に就いて学び、寛政元年（一七八九）鈴屋門に入って国学を究め、文化六年（一八〇九）六十三才にて歿）によって文化三年（一八〇六）道麿翁の二十三回忌にあたり翁の経歴や逸話を記した「しのぶぐさ」……道麿伝には最も信憑すべき資料とされている。

② 道麿と師宣長―道麿は鈴屋門の長老として世俗的な観点を離れて学問上の立場からみれば二人は兄弟であり同志であったようである。宣長は道麿の勢望と地位、その学殖の深さを十分認識して尊重し形式的には門人とはいえ、門人を以て遇する様なことはなかった様である。この二人の密接なつながりを僅かな資料から望みたいと念ふものである。

③ 昭和三十二年十月四日（一九五七）翁の祥月命日に飯ノ木源氏橋の畔に建立された高さ約三メートル巾約一・三メートルの「田中道麿翁顕彰碑」の碑文も敢て掲げることにする。

以上纏めて一書とし道麿翁研究の資となることを深く願うものである。

平成二十八年六月一日 山口 一易

凡例

- 一、本書の執筆は山口一易氏が行った。
- 二、「榛木翁書簡五種」については、中西慶爾一九七八「榛木翁書簡五種」『文莫』第三号を基に執筆した。「しのぶぐさ」については、筧五百里一九五六「田中道麿呂と御国詞活用抄」『岐阜大学学芸部研究報告 人文科学』第八号を基に執筆を行った。いずれも、文体・仮名遣・句読点などは原文に習い、漢字の読み・意味・事項について筆者の解説を加えたものである。
- 三、「本居宣長と田中道麿とのつながり」については、中村準一九七二「郷土の国学者―万葉集研究 田中道麿翁」『養老町の文化財』第四～八号（養老町文化財保護協会）と、二〇〇五年十二月十日に行われた町民大学講座「歌を詠む 道麿さん」本居宣長記念館吉田悦之氏講演資料を主に参照し執筆した。

目次

榛木翁書簡五種 筆写・・・・・・・・・・・・・・・・五頁

榛木翁書簡五種／書簡五種を拝して

加藤磯足著 しのぶぐさ 写・・・・・・・・十九頁

しのぶぐさ／読字のあとに

本居宣長と田中道麿とのつながり・・・・・・・・二十七頁

本居宣長と田中道麿／仰慕碑に寄せる歌

榛木翁書簡五種
筆写

榛木翁書簡五種

其の一 年代不詳

其後

候

祝

玉粹(消息文)

こなたゆはおこたりがちに過行まゐらせさもらふを、年のはしめのほがひの玉づさおくり玉ひつ。いとうれしみつゝをがまひまつる。

親爺 振

寿

給

さて、おほせのごと千里の外もおやじぶりにめでたうほぎまつり、いよゝますくつゝみなく年かさね玉ひつるよし、こよなうめでまゐらせつ。おのれはもさはらふ事なう春をむかへ侍りつ。かしこみながら浦安くおほしたまひてよとなもまをす。

己

私

畏

心安

申

なほも春の末かけてかたみにおとづれまつらん事をちぎらひまつるのみ。あなかしこ。罪をおかしつゝ朱もて疑はしきをこ
互にとわりつ。其罪ふかきをゆるしたまひなん。

一月二十二日

む月の末のふつかのひ

をはりなる 道まろがまふす 申

美濃

みぬの国なる大人

大人

ありかのうしへ

其の二（天明三年十月中旬六十才？）

先頃名酒二瓶被下飯木にて封切り兩夜たのしみ人もよろこばせ候。扱々うまかりし事忘れがたく、恭かたじけなくと玄龜公へ御礼御伝へ奉願候。源氏図話写させ可仕候。

九月三日名古屋出立。三日四日と木田泊、五日より十二日迄津島にあり、十二日に飯木泊、十三日暮合より紙氏公に止宿、紙屋岡本喜十郎（養老に薬湯温泉を創む）

廿三日に昼頃高田を出下高田へより、此日飯木に至り、廿四日には庄左エ門の家内不残あたに祭行の畠守申つかり、此日畠

守受取ながらに養老寺と正慶寺へ見廻り、雨に降られつゝ七ツ頃飯木へ飯り、翌日出立せんとする所に大雨、其翌の廿六日

飯木を立て此夕津島、廿七日夕も津島泊り、廿八日に福田と申所へ行んと蟹江といふ所迄行しに福田より文書あり、見れば

此節無抛差合あり近々名古屋の貴宅へ日を申さんと書り、うれしくも此夕戸田といふ所迄り、はゝ木々をよむ、翌廿九日愚

宅に飯る。右の木田よりルスへ追々人来りし由、みのより飯りに立より給ふやと待つに今にみえぬはみのにて病氣などおこ

りしやと是もすてがたく、三十日の朝愚宅を立て又木田に至り、四夜泊りて十月四日の日にまことの帰宅は仕れり。

留守
ルスに松坂より書状来りをり、かのあさまやけを、のり長

八島国 響動 彼 浅間山焼（天明三年） 本居宣長
やしまぐに ひぶきとよもす 迎具土神（防火の神） 荒 畏 語調を整え感動の意を添える語 ……なんだなあ

とよみたりして見せ申候。カグツチは火の神、おのれも其節よみし事ありしをさのみ人にも見せずありしに、のり長におどろかされて、今なん申す。
驚・気付く

地震

なるのごとなる神のごと日ならべてつちもとじろにゆすれるやなぞ

揺 何故・謎

ばか 五穀

人皆のおどろく斗りとどろくはおくつみとしのよろしけんとか

(賀茂真淵の著)

オクツミトシは五穀の事、祝詞考に有り、忠臣人物御座候。ゆるりと御読の上使に御かへし可被成候。

かへすくどなた方へも厚く御伝へ申し可被下候。

あな 穴かしこ

十月中旬

紙氏公 初代岡本喜十郎 島田村高田元町で紙屋 一七四〇年頃

一七五一年頃 宝暦年間に養老湯の山に住居 千歳楼

勸孝石 勘考石

其の三

鈴木庄左衛門被参候に付一筆啓上仕候。弥御安康可被遊御座珍重候。誠ニ先々月には、ぎの巻御かし被下、慥に恩借仕候。

帝木の巻(其の二)

其後以書中御礼申すべく候処可然幸便を得ず失礼仕候。右都合十四卷はや一両辺もよく味参候。近き内よろしき幸便候はゞ

訪れ

返上仕度奉存候。飯木よりもし足下へ此義に付おとづれ仕候はゞ右之次ぎ御かし被下度奉願候。近内飯木より此方へ参る人

有る筈

もあるはずの様子に御座候。

片た端 大略

?無造・失礼

問はず語り(尋ねられないのに)
(目分から語す)

一、別紙万葉集のかたはしあらまかながらふと存付書しるし入御覚候。甚以無蔵の至世にいふとはずかたりにおはしまし候へ

(明和五年刊)

共、御心安く奉候其一章書しるし差上参候。万葉考ならば憚ながら古言にて書しるしたるものに候へば定めていまだ御よ

痴がまし(差し出がまし)

十のうちの六七(六七割)

みなされぬ所々にも可有御座奉察候。をこがましく候へ共よほど承り居り候故十二六七は相よみ、万葉考を見る事唯雲霧払つ

下総

歴々(身分家柄のすぐれている)

て日月を見んが如く悦入参候。万葉考の序に出たる楯取魚彦はしもつふさの国の人、真淵門人のれきく(かぶりなひと)のよし承り候。

(明和五年刊)

仮名遣い

此人の述作に古言梯と申物御座候。これはかなつかひをしるしたるものにおはしまし候。求めて御覚可成候へかすと奉存

候。

種々(いろいろ)

言葉を解く

由無し(根拠がない)

一、其序のくさく(く)の考と申内に、コトバヲトクコトと申条に曰く、古き言は五十音をよく知らでは、とくべきよしなしと相

見え候は足下は得心被成候哉、いか称此義はあまた人も知りたる事ながら、此五十の音を誠にくはしく知る人はまれなる

ようやく(やつと)

物に御座候。拙者なども此事に数十年くるしみ参り候処。やうやく(つひめ)此四月上旬にはじめて其のまことの所を知り得申候。

不躰(無礼・むきたし)

得心

一、ぶしつけなる申事に候へ共、万葉考の中に所々何々の約(つひめ)略(はぶ)キの事御とく心参り候哉。もし万一いまだ御得心なく候はゞ

例

其の内其あらまし書つけて入御覚可申候間幸便に御しらせ被遊候。たとへばかたもよかたまもちふくしもよみふくしもち

といふ歌の内にナノレをのぶればナノラセと成を其ラセのセをのべてサネといふ也とあるたぐひの事也。右をいまだ御得

心あるまいとまうすは甚無礼く(く)しかるを御心安く存じ奉申上候。

そ(粗)

右此愚状相認候時にあたりて酒一つたべ候節にて愚状の文言も後やさき。右たよりは急也。悪筆麁筆にてよみがたき言多

かれば推読可被下候。扱御家内様へも以愚礼申上度候へ共たより急故はぶき參せ候。御次手に宣奉存候。恐_ニ謹言。

八月十一日

田中庄兵衛

柏渕藤左衛門様

其の四

御細書忝拜御安靜被遊御座奉珍重候。然は御詠歌めで度御調被成候御事と奉存候。八論髓に落手仕候。

一、玉詠三首之中多度山の御分殊にめで度拜見。二三の句霞の衣春風にと改玉は_{ひとしお}一入めでたく候ひなんと奉存候。梅が香て

ふ御歌、宿ちかく梅花うゑし_{味気}あちきなく待人の香にあやまたれけりてふを思ひ玉へりときこえまゐらせ候。さて初句梅が

香もと改玉へかすと奉存候。曲水の御分は此上今一応御考へ可被遊候。コト国のとのたまひし意は_{唐国}から国のといふ意と承

り候。から国をコト国とはいひつべき事ながら其例承り不申候。卒句の花の盃と申も何とやらん後世めき、下句の体水の

まに／＼花の盃と申て義をなさぬさまに奉存候。第三句のけふをしてもふもけふはしもの意と奉存候。

一、先立而愚礼奉り候節何を申上候か今以て覚不申其節醉狂_ニ付失礼仕候。然は此度善之君に承り候へば万葉考の序文の通解

申上候由、失礼なる事なるを還つて足下悦ばしく思召被下候由善之君御物語、但此度の御状にも此後無隔意何事も申上候

由に被仰下御念比_{ねんごら}なる御文言、約略の事伝授可仕段も被仰下、右申上候通醉狂に何をか申上候はん。さり乍らひとつ二つ

_{つづめはぶき}

_{終りの}

_{異国}

_{唐国}

覚まかり在候義可奉申上候。

一、和音五十字の事、世間通例の人の覚罷在候所は、

あいうゑを やいゆえよ わるうえお

正しく知っている

此十五字の正義しれりし人まれに御座候。残る三十五字は異説なく、只此十五字には既に区々なる□□□御座候。さて此十五字此通にて誤りに御座候。

加茂真洩の五十字は

あいうゑを やいゆえよ わるうゑを

如此に御座候。是も正義にあらず、真洩ほどの人も誤られ候。さて真洩の門人に魚彦ナビコてふ人あり。是も初は此真洩の通りに此十五字を書被申候。後には改めて正義にもとづかれ候。さて名ははたと失念すつかり忘れて仕り候が、和字大観抄と申書フミをあらはしたる京の沙門あり。此人の五十字正義に御座候。さてその正義は

あいうえを やいゆえよ わるうゑお

コレト思へどしりたる人なきものにおはしました候。此処に数十年くらし罷在候而彦根にても度々沙汰いたし候へども正義相しれ不申候不凶先月上旬フトいたしたる事ありて正義にもとづきまゐらせ候。

一、約の事は人々能御存知の事、二字を一字に約よくメ或は三字四字をも一字につゞむる事也。百人一首の中に申さばいづみきと

てかといふきノ字はけりの二字を一字にしたる物也。ちぎりきなきも同じ。親鸞上人の和讃にては童宮に入りたまひに

御文

きといふき、蓮如のおふみの中ではいつのまにかは年のつもらんとも不覚しらざりきといふき皆同じ。うかりける人はつせの山おろしはげしかれとはいのらぬ物を、此かの字二句なからくあ。の約なり。粉引歌にわしとそなたは朽木クチキのきやらよ中のよいのはひたしらぬといふた字はとの約也。服部ヘトリ此はとりといふとの字はたおの約也。右此たぐひあげていひがたし。さて其二字を一字につぐむる法、たとへばけりの二字をつぐむるにはらりトいひてゆび二本をる也

ラリルレロといふ事あればなり

カキトいひて其の二本のゆびをのばす也

カキケコといふ事あればなり

其二本のゆびののびしまひの時にあるこゑが

即ちつぐまりたるこゑ也。皆おしてしろしめし玉へ。かやうの事は筆談にては思はしからぬ物也。もし此指のをりのばし
の事御得心なく候はゞ飯木の収角ちふ医者にきゝたまへ。しばらく此事被存候。

一、三字を一字につぐむるは中の一字を畧する也。さて上下の二字斗を右のごとくにつぐむる也。四時の時も中の二字をすつる也。神代紀に鉤をちとよめり。鉤はつりばりといふ字也。そのツリバリの四字をちの一字にしたる也。

一、通音といふはきの葉この葉きつねくつねといふたぐひあげてかぞへがたし。万葉の今本の第五巻にうきぐつをふみぬきてゆくちふ人はいはきよりといふ長歌あり。此ちふといふ詞はもとといふといふ詞也。といの二字をつぐむればちとなる故にちふといふたる也。さて此ちふといふ詞奈良の都の末今の京のはじめにてはてふといふ詞にうつりたり。ちトてトはたちつてとの通音なれば也。さて又同第五巻にさよひめの子が、ひれふりきとふといふ歌あり。此下の句の心はさよひめ

の子がひれふりけりといふといふ詞也。といふといふ詞をとふとつかひしはといふのいを畧ける也。

右此ちふとふてふの事は万葉考別記有云といふ条にくはしくかけり。

アリトウ
アリテラ

一、右に申上候通り二字を一字にするにはたとへばといの二字なればいの字からさきへ還る也。右に申す通りあいと指二本をりたちと其二本をおこす也。といの二字なればまづとの一字から先へしさうな物なれど、さか様にいの字から先へしかゝる事也。何にても下の字から先へゆびをりて次に上の字にて指をおこしのばす也。おこしのばすしまひの指のこゑが其約りたる字音也。

一、ナムアマミダブツといふべきをナマイダブといふはムアの約マ也。ミトイト通音也。三十一の一ヲさんみち三十一といふが如くすぐろくにもさんみちといふが如し。ブツのツははぶける也。さてこそナマイダブとなる也。

一、詞をのべる事あり。これはつづめるの裏なれば論なし。不をのべて不とするか、ザルを約めてズとするか也。

一、かるが故にといふ詞を日本書紀にてはかれにといふ。又源氏物語にてはけにといへり。是らはルカユエの約なる故にかれにト成り、さてカレの約メケなれケニと成る也。如此二重につづむる事もあまたあるよし也。

一、和音五十字い。う。えの三字かさなりて是をはぶけば残り四十七音、此四十七字変じて百二十音となる。此事人々能御存知の事ながらいまだ是を百二十音ときはめて書せる人なし。百二十音ときはめたるは此間拙者が了簡也。其訳は右此内半濁五音といふははひふへほの五音をワキウエオのごとく唱ふるをいふ。たとへば川十灰上塩などの類也。半清五音は十羽先非

天府源平春圃テフの類也。臨時音はたとへば今晚はといふをこんばんベイとなへ、昨日はといふをさくじつたといひ、権輿クワンと

いふをけんによと唱ふる類、仏恩をブットン観音をクワンノンとする類あまた也。清四十七はいろはの通り勿論也。濁

二十音はカキケコ、サシスセソ、タチツテト、ハヒフヘホ此二十音を濁音にとなふる也。

一、みのより西にさうじやかうじやといふを尾張にはさうでやかうでや、三河より東にはさうだかうだといふ。案ずるに此

詞の本義はデアモトルといふ詞也。さうであるかうであるト云ふが本語也。尾張のでやハでやにはあらでデア也。みのゝじ

やハじやにはあらでデア也。でとぜと通音也。さてなぜといふ詞をなぜといふ国あり。又なんでといふ国もあり。むか

でヲむかぜといふ国あり。薩摩国などにてはそれでこれぞといふ詞をそれぞこれぞといふ。是ら皆でトぜとかよふ証なり。

扱こそで。あはである也。ぜあもである也。三河のだけはあつゞまれる。

一、もめんのふだんぎつむぎのとつとき此とつきのとの字はておの約メ也。

一、かねもちは錢ももつとる米ももつとる是らのともておの約也。

一、はちくまだけといふまだけはまだらけの約也。ダラの約メだ也。

一、美作州をみまさかのくにといふ。其の美はみにて申分なし。作ハサクなるをサカトかよはせて亦申分なし。さてみまさか

のまの字は何ぞや。答曰はハみさの約メまなればそのまの字を美作ミサカのミサの間へはさみたる也。

一、陸奥は元来みちのおくなるをミチノクといふはのおのつゞめなればならん。又はそのおの字を畧けるにてもあるべし。

(はじまり・おこり)

一、紀伊とはかけどキノクニとよむべし。キイノ国とよむ事勿れ。さて又河内を俗にカハチといふは誤也。かな本の伊勢物語にカウチとするも亦誤也。其正義はカフチ也。此のフの字はハウの約也。美濃もいにしへはみぬ也。但馬もたぢま也。たじまにあらず。隱岐はおき也。をきにあらず。尾張はをはりなり。おはりにあらず。

右数章申上候事の罪ふかさ、もしひとつをも君が道かん事あらば幸とやいはん。あなかしこ。

五月廿二日

野人道まろ

琴松大人

其の五 天明四年四月頃のもの 同年十月四日 六十一才で死歿

先頃幸々幸便に御状被下候所先以御安康之段奉珍重候。然は愚老早春より可参申上候については定て御まち被下候について御邪魔にも相成候事候ひつらんとときの毒仕候。然共御中もさのみおもとにてもなく医師も近々には十八九人に及び申候はん。過急に本復可仕様子相見え不申此ころト相成はや廿日あまりも一向からだよはりは申候様不覚、もとより去去月十三日より当地の内あるき不申愚宅にてのよみ物もなく只々療治一件に相かゝり居申候仕合、かくてはよしや近き内に本復に至り候ても急に力づき旅行等のなりさうなる事トモ相見え不申、且又老病の事豚と食もあてに相成不申、何れの道にも盆前には全快申間敷キ様子ニ相成り申候。いよ／＼日日薬秋時トでも相成本復仕候はゞ参上相面可仕候。食物も三度ながら白かゆに

かうじみその外に口中に叶ふものなし。然共其かゆを大抵一日に白米三合程のあてにたべ申候へば小食と申にも御座無候。

中西慶爾氏は自著書の末尾に

右「榛木翁書簡五種」は田中道麿翁が郷里の門人柏淵藤左衛門氏に与えたるもの、末孫の柏淵東氏の所蔵にて二曲屏風に仕立ありしを大正十一年四月大久保休吾氏が写書しおかれしもの也。

原本は東京震災（大正十二年九月一日（一九二三）にて焼失せしといふ。当時大久保氏より得たるものを今日にいたつて浄書するに、誤字かと思はれる点多少あれども、今は詮なし。往事茫茫たり。

昭和五十一年七月廿六日

朱実艸舎にて

中西慶爾しるす

書簡五種を拝して

今まで学習して来た古文書とは一味違って形式にとらわれず道麿翁の行動力、記憶力、記述力…と豊富な上に温味を覚える書面だった。手紙を書くに下書きをし浄書する様なことはないでしょう。すら／＼と淀みなく筆が運ばれたと感心するばかりである。

生涯万葉集の研究に寝食を忘れ専念されたと聞き及んでいるが、

・其の三に「万葉考を見ると唯雲霧払って日月を見んが如く悦入参候」…と記されその精進さが窺い知ることができる。

・其の四に至ってはこれ丈の長文を一気に書かれたのだろうか。

・和音五十音のこと、約メ略キのこと、通音のこと…細かく例をあげて列記されているが私にはすんなりと理解できないところもある。文中筆談にては思わしからぬものなり記されているが直接指導を受けたき思いにかられる。只々懼れ入るばかりである。

其の四中、約メの事の条の末尾に「飯の木の収角ちふ医者にきゝたまえ」と記されてあるが今のところ飯の木にお医者さんが居られたことは判らない。誰も知らないと云う。同様其の二、其の三の頭部に書かれている鈴木庄左衛門も判らない。姓を持っていることから歴とした人であろうに飯の木の鈴木はなかったとされている。歴史研究者の或る人は飯の木は幕領で

あつたし高須藩の家臣だった九毛兼由（徳永法印に仕え五百石、飯の木に住す）の居住地でもあり医者も派遣されていたかもしれぬと。いくつかの不明の点、何とか判る途はないものだろうか。

加藤磯足著

しのぶぐさ
字

しのぶぐさ

この書は田中道麿翁の門人であった加藤磯足の著である。磯足は尾張の起町の人で、初め、細井平洲について儒学を修め、後道麿翁に師事して国学を学んだ。翁の歿後五年にして宣長の門下に入る。「しのぶぐさ」は翁の二十三回忌に当る文化三年（一八〇六）に先師を追憶して書いたものであるから、最も信憑すべき資料の一つとなっている。

つれづれとふりくらす五月雨の空の、いと暮（更にいつそう
たぐいでせえん）がたきに、そのことなく物悲しうて、はし近うながめいたしつ（何となく）すゞろに
こしかたの思ひつゞけらるゝまゝに、

ひたすらにむかしをしのぶ宿とてや 軒端の草も茂りゆくらむ

また、

五月雨の古きむかしを諸ともにかたらふ友もなき身なりけり

（独り言）

などひとりごちて、あはれいたくも老にけるかな、などうちなげかるゝにつけても、思ひいでらるゝことは、磯足若かりし
ほど、道麻呂の翁にしたがひて、万葉集をはじめ、これかれのふみどもを学びけるも、まだきのふけふのこゝちせらるゝを、
（昨日、今日）

飛鳥川流れてはやく、翁身まかられてことしぞ廿二年にはなりにける。此翁は世にめづらしき人にてありけり。その有し

(様)

やうは、みのゝ国多芸郡榛木の里人にて、父は田中のなにかしとて、おほみたからの身ながら、苗うゑ稲かるわざをもまめ

(農)

(戯れる、好色めいている)

やかにせせで、なにくれと、やつくしうあざれたる事のみをふるまひたる人とかや、さる家に生れながら、翁をさなき程

より、見るものきく物につけて歌をなんよまれけるとぞ、いともくあやしき人なりけり、はじめて歌をよまれけるは九つ

といふとしとか、手ならひの本のつゝみ紙に

(読本?)

(手本)

十九本手本也けり六三郎和俗文章手ほんなりけり

(俚び言)

といふ事をなんかきつけられける。六三郎は其ほどの名なりしとぞ。こはさとび言のまゝなれど、いさゝかもてにをはのた

(文法的な助詞など)

がひなくて、其心明らかにかきこえ、また二五の句におなじ言葉のあなるは、いともいにしへの歌のしらべなるを、それにか

(兆)

なひたるは、後つひに万葉集の歌を深くしのばれぬべきことのきざしともいふべく、又言霊の神のさちともさちとやいふべ

からんと、あやしくたふときことなりかし、をよづけゆくほど近くも遠くも、そのわたりに歌ぶみもたる人あれば、かりて

も見写しもとりなどして、ますく歌に心よせられけるに、見と見られけるふみども、みな六七百年こなたの物なれば、何

(訪う)

くれとうたがはしき事どもの多かるまゝに、歌に名高き人とあるには、行とぶらひて、心得がてなるふしくをとはれける

(秘め事)

(知り極む)

に、こはひめぐと也、そはわればかりのものゝしりきはむべき事ならずなどいひて、さだかに理りもてときさとす人あらざ

りしかば歌てふものこそいとも心得られね。さることまなびてなにかはせんとて、廿八といふとしより、歌よむこともふ

み見ることも、ふつに思ひとまられけるとなん。さて其頃はあやしげなるをのこどもをひきあて、池ほり堤つくことなど

をなりはひとして、伊勢近江わたりなどにも常に行通はれけるに、三十四といふとしに、あふみの国の彦根に行つて、なに

とかやいふ寺に日頃やどり居て、かのなりはひのことをものしてあますかりけるに、ある日あるじの僧のいへらくは、此と

(大菅中養父)

なりなる大菅のなにがしといふ人こそ歌の道にならびなき博士にはあれといふことを、ものゝついでにかたりけるを、翁か

(若き頃・早くの年)

たはらにきゝをりてはやくのとし頃、うたがはしう思はれたりける歌ぶみのをぢくをものにかきつけて大菅氏に此ことさ

とし給ひねと、あるじの僧にあつらへられけるに、二日ばかりありて、こたへものして返しけるを、翁いとうれしくもこそ

といたゞき見て、心ゆかぬさまして、さてもしたりがほにはかゝれたれど、是ばかりのことは、おのれも明らめしりつるも

(博士)

のを、さはとなりのはかせも心にくききは人にはあらざりけるよとつぶやかれけるを、あるじの僧きゝて、また其よしつ

(眩)

(得悟)

たへければ、大菅おどろきて、かの人をあなづるにはあらねど、身のわざのいやしきよしなれば、深きことわりはえさとら

(答)

(対面)

じとて、たゞ大かたにこたへたりつるを、あなかしこ、よしある人にやあらん、いでさらば、たいめしてつみゆるされなん

とて、やがて寺に入来て翁にあひて、おのれは大菅の中養父とて、加茂の真淵といふ人のをしへ子にて侍る也。さきにとひ

給へるをぢをぢ、まことにはかうくになんと加茂の翁のいにしへ学びのおもむきもて、くはしう物がたらければ、翁、

さこそあらめとうべなひて、とし頃のうたがひども、ちりもくもらずはるけ侍りぬとて、かぎりなくよろこびて、さて、此

五とせ六とせ歌学びうちすてつる事などをかたりて、いまより又、歌の道に入たち侍りてんとて、をしへ子になし給へと

深くちぎりて、それよりの堤つくわざをもやめて、もはらそのをしへをうけん料に、やがてかの彦根に住なんとて、井伊

の殿に仕ふるなにかしの家の仕へ人になりて、いとまくのひまには、夜昼となく大菅氏のもとにかよひて、万葉集古今集などをひたぶるに学ばれけるとなん。かくて十とせばかりもかしこに住れけるに、いかなる故にかありけん。明和のはじめ

(名古屋)

(二七六四)

の頃より、奈兒屋にうつりて、はじめは商人の家人となりて、いやしきわざをもなし、後はある殿人の家に仕へられけるに、おなじつらなる人どもの、おほかたのまじらひはせずして、暇にだにあればひたぶるにかきこもりて、歌ぶみをのみいそし

(交わり)

み学ばれけれど、さりとて、さるかたの聞えある人などにもほのめかすことなく、歌などよみても、たゞおのれひとりの心やりにせられければ、さる人ありとしも、たれしる人もあらざりしを、安永のはじめばかりに、狂歌といふものかきあつめ

(二七七二)

たる冊子のあるを見て、其歌どものよしあし、また後の世のならはしにしていへることわりにたがへる事どものあるなどを、ふとあげつらひて、物にかきつけられたりしが、こゝかしことちりほへるより、はじめてかゝる人ありと、こゝらの人

(三人)

のしる事にはなれりけり。かくて、なにがしくれがしみたり四人、いと心にくき人に思ひて、たいめをこひて歌ぶみのことどもをとひきくに、よそにきゝたりしよりは、近まさりして、めでたくたふとき事どもなりければ、かゝる人をかくておきたらんは、あたらしき事なりとて、又おなじ心なる人どち、これかれかたらひあはせて、つかへをしりぞかせて、なにかし

(惜)

(仕)

(退)

の所に住どころものして、むかへいれて、もはらいにしへ学びの大人となんあがまへける。かの人々は鳥井海士彦・早川白津子・桜田茂見などいふ人々なりけり。それよりおしたちて、いにしへ学びのおもむきをときをしへられけるに、やうくひろごりゆきて、ともがら多くなりて、この尾張国に、皇国のいにしへのぶ人々の、をちこちさかり出きぬるは、また

く此翁のいさをになん有ける。磯足も、其頃よりぞをしへ子にはなりぬる。さて翁の常のおこなひよ、着ものくひもの住ど(食)

ころ又女のうへなども露心なくて、よろづたゞあるにものして、ふみ見歌よむよりほかはなす事なくて、いみじうめでたく、

おほかたの人の絶ておよばぬさまになんありける。かくては、さとりたりなどいふ法師のおこなひにひとしともいふべけれ

ど、さるくすしきかたはなく、ものゝ哀をしるといふやまとだましひいみじうて、いたり深くまめまめしき翁になんいまし

ける。しかるに、さばかり高きよはひといふばかりにもあらで、天明の四とせといふとしの神無月の四日、六十四にて身ま(一七八四年)
(十月)

かられけるぞあたらしきや、其をり、やまひやうく重くなりて、今く見えける時に(惜きこと)

けふらかも横さま風のおほひこば いのちをしけどすべしらましや

となんよまれける。中頃の世より、学問などする人は死んとする時、歌にまれ詩にまれ、心ぎよく思ひとりたるさまのそら

言どもよむを、たけきことにいひ、もてはやすめるを、かの業平中将の、つひにゆく(宗々・主だつた)の歌こそ人のまことの心にして、いと

めでたく昔よりたぐひなき事にいふを、此翁の此歌も、中将のに次てめでつべきものにこそありけれ。さるを教へ子のむね

むねしき人々も、今は大かたむなしうなりて、諸ともに昔をしのぶべき人もなければ、世にあやし(歪)くたふとき翁の有さまを

もしる人だになくなりなん事のあたらしくなにくれとしのばるまゝにかくしるしつれど、老のひがおほえなれば、猶もれ

ぬることもたがへるふしくも多かりなんかし。

(二八〇六)

文化三年五月

加藤 磯足

読字のあとに

しのぶぐさの著かれたのは道麿翁の歿後二十一年、二十三回忌にあたる文化三年（一八〇六）である。そして三年後の文化六年（一八〇九）十月十二日 六十三才で歿している。だから磯足六十才の時の著である。

その記憶力の非凡さに驚かされる。十年も経てば一と昔といわれ大抵のことは忘れられてしまうのだが、はっきりと記されている。翁の幼少の頃のことまで……それは師弟の心のつながりの深さによるものであろうか。私など小学校時代のお世話になった担任の先生の名前と風貌はぼんやりと覚えているものゝ出身地がどこで、年齢がいくつで、その後の消息など何も知らないのに……。

これ程までに師を仰慕してこそ学究の真髄にふれることが出来るのだろうか、只々敬服するのみである。

本居宜長と

田中道磨とのつながり

本居宣長と田中道麿

明和八年（一七七七）本居宣長「てにをは紐鏡」刊行

安永五年（一七七六）本居宣長「字音じおん仮字かなづかい用格」刊行

道麿同書の「おを所属弁」を手にし、その論証の見事さに驚嘆。

積年の疑問が一挙に氷解したのであろう、学的希求が松坂へと駆り立てたのであろう。

安永六年（一七七七）七月十八日名古屋出立、松坂へ。二十日宣長と対面。

「山辺五十師原之考」を借覧、帰路山辺（鈴鹿市）一帯を探索。

帰郷後「万葉集」についての質疑を開始する。

安永九年（一七八〇）正月八日、名古屋出立、再度松坂を訪問。入門。

「美濃国 尾張国名古屋住 田中荘兵衛 道麻呂」（授業門人姓名名録）

天明三年（一七八三）二月、六十賀、この頃剃髪して名を「道全」と改める。

「田中道麿像」は此の頃の姿を写すか。

天明四年（一七八四）十月四日 名古屋長者町常瑞寺にて死去。

「おを所属弁」とは…五十音図における「お」と「を」の所属についての論である。日本語の音韻や文法を考える上で基本となるのが五十音図—あいうえお・かきくけこ…である。この五十音図の「ア」行の「オ」と「ワ」行の「ヲ」が平安末期から混乱しはじめて、その結果、あいうえを、わゐうゑおとされてしまつて、以後数百年もの間誰もその誤りに気づかなかつたのである。その「オ」と「ヲ」の所属の誤りを理論的に実証的に解明して、あいうえお、わゐうゑをという本来の五十音図に復元すべきことを論証したのが「おを所属弁」である。

宣長の記に「先年尾張の名古屋の田中道麿といふ人、己か「お」「を」の所属を改めたる説を聞きてたちところに旧來の誤をさとり、大いに感服して…(中略)此道麿は妨げなきことをよく解さとるもの也」(天明六年八月二十日付)とある。

道麿の記に「前畧、是らの事いかにしてよのつねの人、心つかんや、是憚りながら先生(宣長)の御心より思ひ給へるにあらじ。言玉の神のしか思はしめ給へるならんこそ、おもほゆれ、あなかしこ」と宣長を「言靈の神のごとくだ」と讃嘆してゐる。

之に対し宣長は、「前畧、己多年此事に心を尽くし、自然のテニヲハの妙処を見出たるに誠に然りと信ずる人、天下にありやなしや、よし知る人なくとも、道麿主一人己か功を知り玉へば己か功むなしからずと、悦にたへすなん」と記している。

安永六年 宣長と対面「山辺五十師原之考」を借覽、「宣長宇士の記たまへりし五十師原のふみを拝まつりて即よみて奉れる歌」として

吾せこかこゝとをしへし山のへのみ井のまし水汲てそあかしか

山辺のいしの原なるまし水はくみて得こそさやけしといはめ

みぬ人 たな道万呂上

安永九年正月名古屋出立、松坂を再訪し入門、今までは同学という立場であったがこゝに正式に弟子としての礼を執つたのである。道麿五十七才、宣長五十一才であった。当時道麿は三都に次ぐ名古屋で、既に多くの門人を擁し、名実ともに尾張和学の頭領であつたが、六才の年令差をも気にすることもなく、宣長を師と仰いだのである。鈴屋門人として伊勢国以外の入門者はこの道麿が最初の人であつた。宣長と道麿との関係は入門を機に一層親密の度を加えていった。

天明三年 宣長は道麿の六十賀を祝つて

うつせみのよの長人はちとせへて君こそあらめ世の長人と

また道麿が薙髪して「道全」と号したと聞いて

たくひれの君が真白髪わゝけてもあるこそよけれあたら真白髪

と半ばからかうような歌を詠んでいる。

天明四年春ごろから道麿は病床に伏し、それがやがて命とりになつてしまった。中風あるいは喉頭癌ではなかつたかという。

宣長は道麿門下よりその病状の報告を受け、医師でもあつた宣長は、

とかく不治之症之様に被存、扱々此方にも頼みすくなく存候事に御座候（七月二日付）と途方にくれた言葉を洩らしている。

そして十月四日夕道麿死去、絶筆となった辞世の歌

我ゆ後 世に経ん人よ 天地のかゝるいかりに相逢ふなゆめ

この愛弟子の訃報に接した師宣長はその痛恨の嘆きを次のように詠んでいる。

田中道麿がみまかれるをかなしみてよめる。時は十月の四日になむ有ける

夢かも およづれかも 道まろは いのちしにきと 玉づさの 人ぞつげつる えかなしゑ

ひさしに見ねば 恋しけく 有けるものを えかなしゑ 我はかなしゑ 世の中に

いひつぎきたる かみな月 神なき月と たまちはふ 神もなけれや 言たまの

道いそしみし 道まろを いのちしにきと きくがかなしさ（鈴屋集巻五）

天明五年（没後一年目）十二月一日 宣長「田中道麻呂万葉名所歌抄序」を書く。

「たなかの道まろといふ人有けり。尾張国あゆちのこほりの名児屋の里に、めこなどもたらさずて、たゞひとり住けり。はりのきの翁ともいひけり。美濃国のたぎの郡の榛木村の人になむ有ける。さてなむはりの木の翁とはいひける。わかゝりける時より、いにしへまなびに、こゝろざしいと深かりけるを、年まくいそしみけるまゝに、ふるこのことこのこゝろを、いとよ

くあきらめ知てなむ有ける。かのなごやの里に名高くて、したがひ学ぶともがらはた、いとおほかりけり。かのさとにいしへまなびのおこりけることは、もはら此おきながいさをになむ有ける。此おきな、としごろこゝに書かよはし、をりくはみづからもきとぶらひて、なほいふせきくまくとひきつゝ、よはひおくれたるおのをしも、おやのごと思ひ頼みてなむ有ける。としはむそぢに一つあまれる。もゝとせは猶はるけしと、ゆたに思ひてありける物を、こぞの春よりみやまひして、夏秋もうちはへおこたらずて、かみな月ついたちごろなむ。しぐれの空の雲のまよひに、はかなく過いにける。うつせみのよのさがは、すべなかなしきものなりけり。そもくこのおきな、いにしへぶみのあるが中にも、奈良の葉の名におふ御代の歌ぶみをなむ、殊にめでおむかしみて、おくとは考へぬと思ひて、としひさにおこたらずなむ有ければ、むかしより人みなのとしかてにしたるふしくをしも、ときえたるどもおほかりけり。しかときえたる事あるをりは、いかに思ふと、かたらひおこせしを、うべなひやり、又こゝにもあらたに思ひえたる事、いひやりもしけるをりくは、よになき宝をしもえたらむごとくに、いたゞきさゝげもちてなむよろこびをりける。かくて年ごろにかきおきつることどもはた、それかれとおほかる中に撰集万葉集、万葉名所歌抄といふあるを、名所歌抄はしも、ことにやみふせしほどまで、心をいれて、床のべさけず、かしらもたげつゝ物したりしを、えたへずて、なからばかりにも及ばず、かきさしつるはしも、殊にあはれなる後の世の形見なるべき物にしあればと、此たびかのともがらの、梓にゑりて、よにのこさむとはかるなる。同じくはおのがひと言をもそへてよと、こひおこすと、其書をしも見せたるみづくきの跡、見るに涙しながれそひて、手もわなゝかれつゝ、えもかきやらずこそかく

いふは、かの翁がうせにしまたのとし、天明の五とせといふしはすのついたち。」

寛政十二年（一八〇〇、没後十五年）十月四日 宣長・道麿十七回忌に追悼の歌を詠む。「田中道麿像」（筆者不明）に賛。

懐旧 さそはれし時雨の雲の跡とほく年のふるにも袖はぬれけり

また、翁の死を悼み宣長は霊前に告ぐる詞を述べて、万葉研究の功績を賞し言霊有功老爺ことだま いさをのをぢと諡している。「告田中道麿之霊詞」に「道麿や、宣長今告ぐることあり、うまらに聞こしめせ」と書出し、道麿の功績を書き連ねて、最後に、

「かれこの功を万世までに語りつぎつゝ俣びにせよと、後の名を称へあげて今よりは言霊有功老爺とぞ云ふべき、かれこの美き名をこの世の苞と負ひもちて、まかり路もうしろ安く罷り通らせと、天明の四年と云ふ年の神無月の二十日あまり三日の日の夕日のくだちに宣長が悲しみ悲しも告ぐるこの言を耳ふりたてゝうまらに聞こしめせことだまいさをのをぢ。」と結んでゐる。

尚十七回忌（寛政十二年（一八〇〇））になってもまだ忘れられず懐旧の憶いを次のように詠っている。

さそはれし時雨の雲の跡とほく年のふるにも袖はぬれけり

仰慕碑に寄せる歌

三回忌にあたる天明六年（一七八六）知己門人の手によって、住居趾靈岳院境内にその仰慕碑が建立された。この石碑建立に際し乞われて二首の歌をおくっている。

伎々弓伎弓美牟比登斯奴弁波理能紀能

多那訶能遠遲賀伊幣杼許呂許礼

波斯祁夜斯美濃能久邇毘登波理能紀能

遠遲賀迦多美能波理能紀阿勢遠

（このことは昭和三十三年に建立された田中道磨翁顕彰碑の裏面の文の中にも記されている。）

終りに

三種の違った面から道麿翁を知ることができた。益々親しみを覚えると同時に尊敬の念を強くさせられる。師を懐い弟子を愛する麗しい師弟の関係、只々、心打たれるばかりである。

五十年程前に刊行された中西慶爾氏著「榛木翁書簡五種」はじめ養老町文化財保護協会誌など、眠っていた資料を繙くうち強く心惹かれる三編を一つにすることになった次第。一人でも多くの人の目に触れ田中道麿翁を究めて下さる資となればと念じつゝ。

平成二十八年七月八日 山口 一易

榛木翁書簡五種にふれて
道磨研究の補記

発行 平成二十八年十月四日

発行者 養老町教育委員会

印刷 サンメッセ株式会社